内村鑑三と「身体の救い」

原島　正

内村鑑三（一八六一年―一九三〇年）は近代日本の生んだ偉大なる思想家の一人である。一八九一年（明治二四年）の所謂「第一高等中学校不敬事件」の当事者、そして日露戦争を前にして非戦論を唱えた社会評論家として、その名は広く知られている。また彼の直截簡明な文章は、多くの読者を魅了するに、ふさわしいものであり、文章家としても一流である。その文章は「現代国語」の教科書に採用されていると聞く。かつ、内村は自然科学、ことに水産学方面の先駆者であった。(1)

たしかに内村は、社会評論家として、科学者として高く評価され得るが、なんと言っても、彼は宗教者である。宗教者内村が同時に社会評論家であり、水産学に関する先駆的学者でもあった。このことが、内村をして独創性に満ちた人物と為し、今日注目されている所以である。

内村は道元、法然、親鸞と並ぶ日本が生んだ偉大なる宗教家の一人である。道元等が、印度・中国の仏教をして日本の宗教、日本の仏教とすることに貢献した仏教徒であったのにたいして、内村は、西洋文明の母胎とも言うべきキリスト教を日本の宗教、日本の基督教とすることに貢献した基督教徒であった。内村自身、自分の使命を日本人による、日本人のための基督教布教に見い出していた。

○若し此誌が此国に於て何にか永久的の善事を為したとすれば、夫れは此事である、即ち、日本国に於てキリストの福音を伝ふるに、教会や外国宣教師に頼るの何の必要も無いと云ふ事である、我等は神にのみ頼りて福音を伝て之を日本人固有のものとなす事が出来る、キリストの福音は外より移植されたる者にあらずして、内より生れたる者ならざるべからずとは余輩の持論である、而して此誌は最も小さき者なりと雖も純粋なる日本の産である、之に教会と宣教師とは何の与かる所は無った、此誌に依てキリストに導かれし者は神が直接に日本人の手を以て己れに導き給ひし者である、而して此誌を以て

余は外国宣教師に何の頼る所なくしてキリストの福音を日本国に伝へん

との余輩が三十三年前、北海道札幌に於て懐きし希望の一部分が達せられたのである。（傍点原文。「今昔の感」『聖書之研究』一二四号一九一〇年十月）。

此誌とは、言うまでもなく、内村が一九〇〇年九月に第一号を発行し、一九三〇年四月第三五七号をもって終刊した『聖書之研究』である。[2] 一九一〇年十月発行の一二四号は、第一号発行後、まる十年を経過した記念号である。内村はその十年をふりかえりつつ以上のような感慨を覚えたのである。

ところで、内村は日本人の手による外国宣教師に頼らない基督教の布教を志し、それを実践したのだが、そのことは決して、基督教の本質を歪めてまで日本に適応しようとしたのではない。[3]

内村は森有正氏が的確に表現したように、「原型的人間」である。[4] 内村はヘブライズムの原型を生きた人物であった。そのことは内村が聖書の思想をその中心のところで把握し、論述したことを意味する。しかも内村は聖書の中心

的思惟に深く根をおろした真理を、社会思想、科学思想に応用しようとした。と言うよりも、内村は、聖書に示された真理、それは、社会思想、科学思想においても同じく真理として示されなければならず、現に示されていると確信していたのである。[5] それ故に内村は単に聖書研究者としてではなく、近代日本における独自の思想家として、今日注目されつつある。

それでは、内村が聖書から学び、かつ社会思想、科学思想においても見い出した真理とは何であったか。そのひとつとして「身体の救い」への信仰をあげることができる。[6]

身体の問題はパウロの神学において「要石」（かなめいし）であると言われている。[7] 内村の場合においても同様である。身体の問題は、哲学の領域において、近々とりあげられており、さまざまの考察がなされている。[8]

身体の問題についても内村は日本プロテスタント神学思想史にあって、先駆者であった。[9]

I

内村の身体観はパウロから学んだものである。パウロは肉（σάρξ）と身体（σῶμα）とを区別して使用している。[10] 内村の表現によれば、肉は「身体を囲繞せる外包」であり、「之眼を以て見、手を以て触れ得べき部分である」。それにたいして、身体は肉の内にあるものであり、「肉若し体ならば身は体の精である」。そして、肉は時いたるならば、神によって滅ぶものである。しかし身体は、「永久に存ち得るのである」。身体は、「主の来りて住み給ふ所、『聖霊の殿』である」。[11] さらに「身は復活せしめらるるのである」。

基督教は霊魂の不滅ではなく、身体の復活を説くところに、特色がある。[12] この点はしばしば誤解されるが、「基督教は希臘哲学（近世哲学も亦然り）のやうに霊肉両性の個々別々の存在を認めない、基督教は人生の渾一を主張する、人の肉体が死んで霊魂が生くるのではない、人は新らしき体を以て再び生くべき者である、霊魂の無い人の無いやうに体の無い人とて有るべきではない、人は若し救はれる者であるとすれば霊肉両つながら同時に救はれるべき筈の者である。[13]」

内村の信仰によれば、霊とともに、身体が救われて、救いは完成する。[14] 何故ならば、「救拯とは何ぞ、曰く霊魂と共にする身体の救である」からである。[15] 霊の救いは完全なる救いの端緒である。「我等は今は霊の質即と見本を受けたるのみ」[16] である。

霊の救ひは既に此世に於て始まった。而して来世に於て身体の救ひが行はるるのである、人格は霊と体とより成る、霊と体と両ながら救はれて救ひは完成せらるゝのである。[17]

別の論文で内村は「身体が救はれずして救拯は半途にして終る」と述べ、「身体の救拯は小事ではない大事である」[18] と言う。その理由は、内村によれば、人格が霊と身体とからなるからである。

人格は霊と体とである、霊のみではない、又体のみではない、霊が体に伴ふて完全なる人格があるのである、其の如く霊のみを救はれて救拯は完全からず、霊と共に体が救はれて完全き救拯があるのである。[19]

基督教は一元論なのか、二元論なのか。このことについて古くから議論されているが、内村によれば、基督教は

「理想としては一元論であるが実際としては二元論である」[20]と述べる。たしかに、私達が霊であり、同時に身体であるのは二元論である。けれども終末において、両者はともに救いにあずかることができ、二元論は一元論となる。そこに基督信者の望みがある。このことは宇宙にも妥当する。

物がある、心がある、唯物ばかりではない、唯心ばかりではない、宇宙は物と心とである。[21]

内村によれば、「真理は円形に非ず楕円形である。一個の中心の周囲に画かるべき者に非ずして二個の中心の周囲に画かるべき者である」[22]。そのことを「哲学的に云へば物と霊とがある」[23]ことである。それ故に「万物悉く物なりと云ひ」て霊の存在を否定することも、逆に「万物を霊と見」て、物の存在を否定することも不可能である。このように真理は二元的であるから、円満に万物を解決することは出来ず、様々の「患難の坩堝」になげ入られることになる。しかしながら、宇宙は、この物と霊との葛藤のなかで、キリストの再臨を迎え、完成へと到るのである。そして、宇宙の完成のときに、私達人類の完全なる救い、すなわち身体の救いも実現する。

生命は霊と肉とであり、宇宙は天と地とである。余の救はるゝは余の霊と共に肉の救はるゝことであって、又余の救は宇宙の完成と共に行はるゝものである、余は肉を離れ地より挙げられて救はるゝのではない、新らしき朽ざる体を与へられて新らしき天地に置かれて救はるゝのである、故に余の救は万物の完成と同時に行はるゝのである。[24]

以上述べてきたように、霊と身体とからなる私達人類の完全なる救いは、キリストの再臨の時、万物興新とともに、実現するのであるが、キリストの復活によって、身体の救いは先取りされている。身体において復活されたキリスト

が、再び来られるのである。

キリストは其復活に由て朽ざる人と成り給ひて、彼が其復活体を以て再び現はれ給ふ時に同質の身体を彼を信ずる者に賦与し給ふとは新約聖書が明かに示す所である。[25]

内村はイエスの甦りが単に霊化ではなく、彼の身体の甦りであったことを、強調する。[26] そして、前掲の引用文にもあるように、キリストがその復活体を以て再び現われ給う時に、同質の身体をキリストを信ずる者に賦与し給うのであるが、その同質の身体とはどのような身体なのだろうか。そのことを考えるために、次に霊と肉との対比について内村の見解を紹介しておこう。パウロは霊の身体と肉の身体とを対比し、霊の身体でよみがえると述べている。[27] 二者択一は霊と肉とにあり、霊と身体とにあるのではない。

霊と対比される肉は、解剖学上または生理学上の肉ではない。道徳上または精神上の肉である。肉は霊の反対であるとともに、霊の堕落した姿である。[28]

神に反きたる霊が節制なき肉の欲として現はるゝが故に之を短縮て肉と称するのである、「肉」は霊である、其事を忘れてはならない。[29]

したがって、肉は決して食うことではない、結婚することではない、肉体の生命を維持し、その正当の発達を計る事ではない。いわゆる「肉」とは、「自己を中心として万事万物を私用せんとする事である、故に憎む事、嫉む事、盗む事、諛ふ事、他人の名誉を害ふ事、是れ皆な肉である、此意味に於いて罪は凡て肉である」。[30] まさしく、「肉の思

いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである[31]」。

以上、「霊」と「肉」との対比に関する内村の見解を紹介した。それでは、「霊のからだ」＝「霊体」とはいかなるものであろうか。内村は「霊体」を次のように定義している[32]。

霊体とは……神より賜ふ霊を宿すに足るの体なり、蓋しキリスト昇天当時の体の如きものを云ふなるべし、即ち目を以て見、手を以て触れ得べき体なり、斯かる体は霊にあらず、気にあらず、確実なる体なり、而かも其如何なる体なる乎、是れ吾人の知らざる所なり

体は内村の考えによれば、生命を容れる器である。肉の体では、キリストの生命を容れるのにふさわしくない。それは、肉体が卑しいからではない。「肉体も亦神の造り給ひし者にして其尊きは言ふまでもなし[33]」である。しかし、キリストの霊を容れる器となるためには、その体は死して、「霊を宿すに足るの体」に復活する必要がある。復活しなければならないのである。旧体と新体とは、その意味では非連続である。けれども、旧体である現在の私達の体は、既に「聖霊の殿（みや）」であり、聖霊が働きつつある[34]。種子はまかれている。聖霊が既に私達に注がれていることで、そこには連続がある。そして、「キリストの贖罪は聖霊の内在に始まって身体（からだ）の救に終るべき者である[35]」。したがって、私達が先ず求めるべきは聖霊の内在と霊魂の完成である。

生命は生命のために貴からず、聖霊のために貴し、聖霊が肉体に在りて霊魂を完成せんがために貴し、健康の回復は我等の強て求むる所にあらず、我等は聖霊が肉体に在りて其中に宿る霊魂を完成せん事を欲す、我等が生命の

一刻も長からんと欲するは是れがためなり、人の肉体はまことに聖霊の殿なり、禽獣のそれと異なり、単に営養の機開として目すべからざる者なり。[36]

内村の人間観は、既に述べたように、肉体と霊魂を同一物としてとらえるところに、その特色がある。[37] 両者は別々のものではない。したがって、「肉に於て不足する時に霊に於て充足する、肉に於て充足する時に霊に於て不足する、恩恵ある神は霊肉両つながらに於て同時に不足せしめ給はない」。[38] けれども、霊肉いずれの充足を求むるかと問われた場合、信者は、「霊の充足」を求むと答えるであろうと、内村は言う。肉体は霊の器として貴くあるが、霊が潔められることが先決である。そこに聖霊の働きの不可欠の所以がある。[39] 内村の神学思想には、この聖霊の働きによる内在的方面と、キリスト再臨による外在的方面の両者がある。身体の救いも、聖霊の働きによって、内から徐々に成就していく方向と、再臨による「万物の復振」(Restitution of all thing)とともに、一挙に成就する外からの方向がある。[40] 再臨運動にあっては、後者が強調されたが、前者、すなわち聖霊の働きの方向がなくなったのではない。むしろ「再臨の希望を懐いて清潔の霊に接することが出来るのである、神に由て起る此希望は空望として終らない、必ずや善き果を結んで信者をして聖霊を自己の霊に招かしむるに至る、論よりは証拠である、此希望の旺なる所に聖霊は溢るゝのである」。[41]

内村の「身体の救い」への信仰は、彼の生き方にどのような意味を持っていたのであろうか。その第一は健康の貴さであり、第二は医学の重要性である。先ず健康の貴さについて内村の言うところを記してみよう。

Ⅱ

内村は常に貴いものとして、第一に信仰、第二に知識、第三に健康をあげ、次のように述べている。[42]

第三の健康の人たれよ、肉体の健康は勿論信仰を曲げてまでも保持するの価値あるものにあらず、然れども百年に満たざる此生命も吾等に取りては亦永生の一部分なり、之を善のために使用して出来得る丈け永く之を楽むは神の聖旨なり、吾等は生くる間は勇ましく生きて勇しく死するための準備を為さゞるべからず。

健康はそれ自体で価値があるのではない、内村は「健康が欲しいのはモット沢山に神の福音を説きたいからである」[43]と言う。健康はなにか価値ある事の遂行のために必要であり、精神と不可分である。内村によれば、精神(ソール)がありて身体(ボディ)がある。身体は精神の物的表現である、精神のある所には必ずこれに相当する身体がある。[44] したがって、健かなる身体は健かなる精神の結果であり、精神と身体との関係は相互的である、というのが内村の考えである。[45]

前述の常に貴いものとしての、信仰、知識、健康のうち、内村は信仰を最も貴しとする。それは精神と身体とが切りはなされないが故である。

肉体と精神との関係は極く緻密なる者でありますから、二者(いづれ)敦かゞ健康に復して他の者が其利益を受けない理由(わけ)

はありません、殊に精神は内であって肉体は外でありますから、内が平癒って外が健全なる感化を受けない筈はありません、今の時に方ては神が若し私共の身体を医し給はんとすれば此方法を取らるゝに相違ありません。[46]

このように、内村によれば、精神と身体は名こそ違うが、実は同一物の両面、内と外である。[47] が、このことは医学の否定を少しも意味しない。むしろ医学の重要性につながる。医学と信仰とは車の両輪のごときものである。両者相まって、人を真に救うことができる。

内村は一九二〇年五月二日の聖日、医学に従事する者の懇親会に臨み感話をしているが、その最初に次のように述べている。[48]

聖書を読みまするに、イエスは人を救ふに霊魂と肉体との両方面より為されました、人は霊肉両性でありますから、彼を救ふに此の両方面より以てすべきであるは明白であります、実に医は伝道の方便ではありません、其半面であります、若し茲に理想的伝道師があるとすれば其人は神学と共に医学を修めたる者でなくてはなりません、人の肉体の医癒を怠りて彼を完全に救ふ事は出来ません、医術に於ても亦然りであります、人の霊魂の救ひを怠りて彼の肉体の病を癒すことは出来ません。

内村が、A・シュヴァイツアーのアフリカでの活動を尊敬し、相当額の金銭的援助をしていたのも、彼に神学と共に医学を修めた理想的伝道師を見い出したからと推測する。[49]

さらに内村は彼の長男祐之が東京医科大学の入学試験に合格した日（一九一九年七月二十六日）の「日々の生涯」

に次のように記して、その入学を喜んでいる。[50]

願ふ神の恩恵に由り彼が善き医師となりて世の苦痛の一部分を除くに至らんことを、祈る我家が伝道師と医師との交はる交はる出る所とならん事を、霊魂を救ふ術と体を癒す術、之に優さるの事業は無い。

つまり、内村にあっては、医学と宗教とは、「実際の所、親密なる友、又和合せる共働者である」。[51]

このように、内村の「身体の救い」への信仰は、健康の貴さ、医学の重視へと結びつくのであるが、その背景には創造神への信仰があることを指摘しておかねばならない。内村が天に召される一ヵ月ほど前の「日々の生涯・一九三〇年二月二七日」に、内村は次のように記している。[52]

書籍は読めないが、自分の肉体といふ驚くべき神の秘蔵物につき、毎日有益なる研究を続けつゝある。実に人の肉体は其霊魂を宿すに足るの器であつて宇宙万物の中これよりも巧妙に出来上つたものは無いと信ずる。同時に思ふことは、疾病は罪丈それ丈恐るべきこと、又避くべきことである。伝道に治療の伴ふは、当然のことであつて、二者相離れて其効力を失ふのである。伝道と治療とは車の両輪の如く、両々相対して行はるべきものであることを、今回熟々(つらつら)と感じた。伝道の神聖なる如く、医術も亦神聖であらねばならぬ。医者の不品行といふが如き、伝道師の不品行といふと同じく戦慄すべきことである。

肉体研究は内村にとってその創造者なる神への讃美であった。内村は若き日、水産動物の研究に従事し、天然界に天然の造り主なる神の摂理を知った。[53] そして、今、病床にあって、自分の肉体に思いをはせ、霊魂を宿すに足る器と

して、功妙に出来上っていることを覚え、神の摂理に驚くのである。[54]

Ⅲ

このように、内村は人を霊肉そなえた存在とみなし、伝道とともに、医学の必要性を唱えたのであるが、そのことは社会科学の重要性にも通じるのではないか。人が身体的存在であることは、人が歴史的社会的存在であることを意味する。[55] 内村が晩年にいたるまで現世に関心をよせていたことと、彼が、どこまでも「身体の救い」を信じかつそれを望んでいたこととは、無関係ではあるまい。

救済は人の心霊にのみ限らない、彼の肉体、社会国家、全世界、全宇宙にまで及ぶべきものである。[56]

ともあれ、内村の独自性は聖書に根ざした信仰に生きながら、同時に日本の現実への深い洞察をしたことにある。内村の信仰と現実との接点となったもののひとつが、今回紹介した内村の身体観、とくに「身体の救い」への信仰であったと言えよう。内村における「身体の救い」への信仰は、彼の宇宙観、科学観を解明する、鍵であるとともに、彼の神学思想全体の要石であるといえないだろうか。[57]

（本稿は「内村鑑三と医学」『松前文庫』第六号、一九七六年（東海教育研究所）に加筆し、註をつけたものである）。

註

(1) 内村が水産学の先駆者であったことは、拙稿「内村鑑三の方法――科学と宗教の関係をめぐって」『松前文庫』第一号、一九七五年（東海教育研究所）を参照。最近の研究として

は、徳山近子「内村鑑三における科学——Practical Science としての水産学・農学——」『科学史研究』第Ⅱ期第一九巻（No. 134）、一九八〇年がある。

（2）六四号から七四号は『新希望』と改題されている。なお以後引用する文献が収められている『聖書之研究』『新希望』は号数と発行年月だけを記す。そして言及しない限り、漢字を現代表記に改めたことをのぞいて、原文のままである。

（3）内村が主張した理想の基督教、それは本来あるべき基督教にほかならないが、「外国宣教師に頼らざる福音的基督教」であった。つまり理想の基督教は第一に外国宣教師から独立したものである。何故ならば独立国である日本にあって、たとえその財政、兵備、教育において独立していても、「国民の精神たるべき基督教」が外国人に依頼したものであるならば、「日本国はその最も深淵なる意味に於て独立国ではない」からである。しかしそれだけでは理想の基督教とは言えない。「吾等の基督教はドコまでも福音的でなくてはならない、儒教的基督教であるとか、仏教的基督教であるとか云ふものは決して基督教ではない」。内村が理想とする基督教は、外国宣教師から独立したものであるとともに、日本の伝統的宗教からも独立したものでなくてはならない。「吾等は仏教徒や儒教徒と与みして宣教師より独立していてはならない」。どこまでも基督教の根本的教義にもとづいたものでなくてはならない、と内村は主張する。「我が理想の基督教」第九号（一九〇一年五月）。

（4）「まず我々は、かれが原型的人間であったということを銘記しなければならない。それはヘブライズムの中心的思想、天地の創造主である神と、その前に責任をもつ魂ということばをもって要約することが出来る」森有正「内村鑑三」『森有正全集』7、筑摩書房、二九九頁。

（5）「神の真理である以上は局部的真理に非ずして全般的真理であるべき筈である。」「望の理由」二一二号（一九一八年三月）。

（6）前掲の「望の理由」に記されているように、基督信者の「望」は特別の望である。「キリスト再臨の望である、万物の復興、身体の救の望である」。そして、内村によれば、基督信者がこの独特の望を抱く適当なる理由がある。「第一に聖書之を明示し、第二に我霊之に応答し、第三に天然之に賛同し、第四に歴史之を説明するのである」。したがって、この希望は信者に限られず、宇宙人類の希望でもある。

（7）John Arthur Thomas Robinson, The Body, A Study in Pauline Theology, 1952. Key-stone を「要石」（かなめいし）と訳したことについては、松永晋一『からだと倫理』

（新教出版社）一九七六年、七―八頁注5を参照。

（8）『思想』（岩波書店）一九八二年八月、No. 698は、「身体」の特集号で、十五の論文が掲載されている。

（9）松永晋一氏は前掲の『からだと倫理』第一章で、近代におけるドイツと英米のソーマ研究史を概観され、次にわが国における研究を紹介されている。名前だけを列挙すると、波多野精一、山谷省吾、松木治三郎、小嶋潤、真方敬道、村上和男、藤井孝夫、である。

この先生方の研究は、主としてパウロ研究の一部としてなされたものである。「身体の救い」に関して深い思索をした日本の基督教思想家として逢坂元吉郎（一八八〇年―一九四五年）を忘れてはならない。逢坂が「身体」の問題を、教会論（聖餐におけるキリストの身体としてのパン、キリストの身体としての教会）の見地から考察しているのにたいして、内村は終末論（キリストの再臨、身体の復活、万物の復興）の見地から専らとりあげている点で、好対照をなしている。いずれにしても、内村は「身体の救い」を強調した先駆者であった。従来の内村研究ではとりあげられていない事柄なので、今回内村の見解を紹介をしてみようと思った次第である。逢坂元吉郎に関しては、新教出版社より、著作集全三巻が出版されている。

（10）ロビンソンも指摘しているように、（前掲書十二頁）ギリシア語の〈肉（サルクス）〉と〈からだ（ソーマ）〉は、いずれも共通のヘブル原語（basar）を表わすものとして使用されている。それ故に、パウロは両者を同じ意味で使用する場合がある。Rudolf Bultmann; Theologie des Neuen Testaments, Zweiter Teil, § 17, Der Begriff σῶμα, SS. 193-203,『ブルトマン著作集』4、「新約聖書神学」Ⅱ（新教出版社）一〇頁―二五頁。

（11）以上の引用は「身の清潔」二一〇号、（一九一八年一月）による。

ロビンソンは前掲書で、肉とからだとの相違を次のように述べている。「〈肉〉は、創造の連帯性のうちにありながら、しかも、神に対して背反的関係にある人間を意味するに対し、〈からだ〉は、創造の連帯性のうちにあって、なお、神に対し応答的関係に立つ人間をあらわしているのである」。さらに、「〈肉〉としての人間は、神の国をつぐことができないが、〈からだ〉としての人間にはそれができる、……しかし、このことが起こりうるためには、人間は根本的に『変えられ』ねばならない。（コリント人への第一の手紙一五章五一節）」とも述べている。山形孝夫訳、四六―四七頁。

（12）この点を明確にしたのが、O. Cullmann, Immortality of the Soul or Resur ection of the Dead?『霊魂の不滅か死

者の復活か』岸千年、間垣洋助共訳（聖文舎）である。内村も「基督教の死後生命は霊魂の不滅ではない、肉体の復活である」と明確に述べ、「所謂霊魂不滅は希臘哲学より出でたる思想である」ことを指摘している。「パウロの復活論」二二六号（一九一九年五月）。その他「基督の復活と再臨」二一四号（一九一八年五月）を参照。

(13) 「処女の懐胎は果して信じ難き乎」九三号（一九〇七年十二月）。

(14) 内村によれば「信者は今猶ほ救拯の途中に於て在るのである」。たしかに、「救拯は既に始まったのである」。けれども「未だ完全に達したのではない、未だ完全に救われたのではない、我等の救はれしは希望に由るのである、即ち希望の中に救われたのである。完全なる救拯の約束を授けられたのである」。「約翰第一書第三(章)一―三研究」一九八号（一九一七年一月）。既にと未だの傍点は原島。内村にとって、救いは既成の事実であるとともに、希望の対象である。信者は救いに関して、既にと未だとの中間におり、救いの完成である「身体の救い」を待ち望んでいるのである。

(15)(16)(17) 「身体の救」二一一号（一九一八年二月）。本号は再臨号である。内村は「身体の救い」をキリスト再臨運動において語っていることに注目したい。その他、「万物の復興」二一二号（一九一八年三月）、「完全なる救」二一二号（一九一八年三月）、「身体の救拯」二一七号（一九一八年八月）でも、同様のことを述べている。

(18)(19) 「身体の救拯」二一七号（一九一八年八月）人格が霊と体とからなることについては次の論文も参照。

「東北伝道」七七号（一九〇六年七月）。

(20)(21) 「完全なる救」二一二号（一九一八年三月）。内村の宇宙観は論じるに価いする問題である。

(22)(23) 「楕円形の話」（上）（下）三五一号（一九二九年十月）。

(24) 「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」二二一号（一九一八年十二月）。

(25) 「復活と再臨」二一三号（一九一八年四月）。

(26) 「我等の信ずると否とに拘はらずパウロやヨハネやペテロの説きたる基督教の根本教義は肉体の復活にあったのである」「基督の復活と再臨」二一四号（一九一八年五月）。内村の復活観については、別に論じることとするが、「復活なくんば救拯はないのである」（同書）。内村の復活観については、田中三一子「イエス・キリストの復活を告げる――内村鑑三の場合――」『清泉女子大学紀要』21（一九七三年十二月）、「イエス・キリストの復活と人間の死――内村鑑三の場合――」『清泉女子大学紀要』26（一九七八年十二月）、を参照。

(27) 「コリント人への第一の手紙」十五章四四節。
内村は「体」と「肉」とを次のように区別する。「ローマ人への手紙」八章十節の注解である。「体は肉体なり、単に『肉』と云ふと異なる、『肉』は主として『肉情』を云ふなり、肉体其物は神の造り給ひし者にして聖き者なり、然れども罪の汚す所となりて、種々の肉情を発するに至れり、肉体は罪の原因にあらず、罪悪誘導の機関となりしのみ、神の憎み給ふ所のものは肉体に非ずして肉情なり、神はキリストに在りて『罪の肉』を滅し給ふ、然れども霊魂を宿す体は終に之を救ひ給ふ。」「羅馬書第八章（上）」七四号（一九〇六年四月）。なお、この一九〇六年の「羅馬書」注解では、肉体の救いを死後としており、再臨についてふれてはいるが、強調はされていない。「霊魂の救は前にして肉体の救は後なり、霊魂は今より救はれ、肉体は死後に救はる、二者等しく終には救はるべし、然れども肉体は一たび死の苦しき経験を経ざれば救はれざるべし。」（同書）。それに対して、再臨運動における講演では、キリストの再臨の時に、天地万物の救いとともに、私達の身体も救われることが強調されている。「万物の復興、羅馬書八章一八―二五節」二一二号（一九一八年三月）。

(28) 「東京講演『羅馬書の研究』第三七講」二六〇号（一九二二年三月）。

(29)(30) 同講、附言「肉とは何ぞや」。しかしながら、「肉欲即ち肉なりと云ひて肉を罪と同視する事は出来ない」とも述べている。基督教は決して禁欲主義ではない。

(31) 「ローマ人への手紙」八章六節。
肉と霊との二者択一については、「加拉太書研究、第十三回肉の行動と霊の結果」二九八号（一九二五年五月）を参照。

(32)(33) 「ガラテヤ人への手紙」五章十六―二四節の注解である。
「保羅の復活論」（下）六五号（一九〇五年七月）。

(34) 「人命の貴きは健康の故にあらず、聖霊の故なり、人の体は聖霊の殿なり、聖霊は人の体に在して其霊魂を完成し給ひつゝあるなり」「祝すべき哉　疾病」一三九号（一九一二年二月）。

(35) 「贖罪と再臨」二一三号（一九一八年四月）。
「初めに資格を賜はり、次に霊性の聖化に与り、終りに霊体を授かりて救拯は完成せらる」。「栄化の順序、約翰第一書三章一、二節」二四四号（一九二〇年十一月）。

(36) 「生命の貴重」一三九号（一九一二年二月）。「霊魂の完成」はルツ子嬢の病気と死とに対面し、熱き祈りとともにひたすら看病していた内村が彼女の身の上に実験されつつあるのを認めた事柄であった。「彼女の肉体を焼燼しつゝありし

疾病は同時に彼女の霊魂を完成しつゝありしなり」。それ故に、「祝すべき哉　疾病」と、内村は言う。前掲書。その他「基督的医師とは誰ぞ？」一三九号、「最善の賜物」一七六号（一九一五年三月）を参照。

(37) 内村は人を霊肉の二性から把握するとともに、心を加えた三分法をとる論文も書いている。「人の三性」一二四号（一九一〇年十月）、「パウロの復活論」二二六号（一九一九年五月）、「人の三分性」二八八号（一九二四年七月）、「三分法と復活」二八八号（一九二四年七月）。

(38) 「霊肉の充足」一二二号（一九一〇年八月）。

(39) 内村の聖霊論については別稿を準備している。

(40) 「万物の復振（Restitution of all thing）とは勿論宗教の復興に限らない、之は政治も教育も実業も美術も、人類に関する総ての事の復振を含んでいる」「基督信徒と社会改良」一三号（一九〇一年九月）。「我等の救の完成は未来に存す、聖霊我が衷に宿りて我れ神の子たるを得しは即ち救はれたるなりと雖も救は之を以て完成したるに非ず、其の完成せらるる時は何時ぞ、我等の身体の救はるゝと共に亦天地万物の救はるゝ時である」「万物の復興」二一二号（一九一八年三月）。「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」二二一号（一九一八年十二月）も参照。

(41) 「再臨と聖霊」二一七号（一九一八年八月）。

(42) 「信仰と智識と健康」六六号（一九〇五年八月）。

(43) 「日々の生涯・一九二一年二月一日」二四八号（一九二一年三月）。

「神は彼を愛する者に唯単に生を楽まんために之を賜へ給ひません、之に由て此暗らき世に在りて光の事業を為さんがために賜へ給ひます、生は恩恵であります、責任の伴ふたる恩恵であります、肉の生命を楽まんための生ではありません、失はれたる霊魂を救はんための生であります」「癒されし者に告げし辞」一八〇号（一九一五年七月）。

(44) 「精神と身体」二〇三号（一九一七年六月）。

(45) 「復活と其状態」一六八号（一九一四年七月）。

(46) 「信仰と健康」四六号（一九〇三年十一月）。

「信仰は素々霊魂の事であつて肉体の事ではないが、然し、信仰の肉体に及ぼす感化は決して居住食物の比ではない、信仰は生命を其根柢に於て養ふ者である、故に信仰なくして真正の健康はない、而して又、信仰があって糧と衣と住との欠乏は補はれて猶ほ余りあるのである」。「平々凡々の記」一五七号（一九一三年八月）。

(47) 「肉体と精神とは名こそ違ひまするが、実は同一物の両面でほかありません、同一の生命が外に顕はれたるものが肉

体でありまして、内に凝ったるものが精神であります。」「信仰と健康」四六号（一九〇三年十一月）。内村における「内と外」の論理については、拙稿「事実の信仰」上『内村鑑三研究』第六号（一九七六年六月）を参照してほしい。

(48) 「日々の生涯」二三九号（一九二〇年六月）。

(49) 内村とシュヴァイツァーとの関係については、野村実「内村先生とシュヴァイツェル」『内村鑑三と現代』（岩波書店、一九六一年、一九頁―三六頁を参照。

(50) 二三〇号（一九一九年九月）。

「当時、発達も不充分で志望者も少なかった精神医学界に身を投じたことは英断であったと、私は今でも考えている。そして鑑三も、私のこの選択を、『魂の医師の次に、心の医師が内村家に出るのはよいことだ』と、心から喜んでいた」。内村祐之『鑑三・野球・精神医学』（日本経済新聞社）、一九七三年、七六頁。

内村祐之『わが歩みし精神医学の道』（みすず書房）、一九六八年、一三頁。

(51) 「医学士武信慶人君を葬るの辞」二八三号（一九二四年二月）。祐之の回顧によると、「私は毎日の勤務を終えて帰宅すると、その日の出来事を鑑三に話した。私の精神科志望に大賛成であった鑑三は、私の話に異常と思われるほどの関心を示し、そして、しばしば言ったものである。『心の悩みを解決するのは、宗教と医学との協同作業だ』と」。『鑑三・野球・精神医学』七七頁。内村における、「宗教と医学」については、補註(1)を参照。

(52) 三五七号（終刊号）（一九三〇年三月）。「身体も霊魂と同じく神の造り給ふたものでありますから、霊魂を癒し給ふ神に身体を癒すことが出来ないといふ理由はありません」『信仰と健康』。病気の癒しについては、補註(2)を参照。

「昔の信仰家が自己の体を見て、『我は畏るべく造られたり、神よ汝の事跡は悉く奇し』と叫びしやうに、今日の学者も亦人体を研究して、その到底人智を以て究め尽すことの出来ない機関である事を知るのであります」。「医学士武信慶人君を葬るの辞」。引用聖句は詩篇一三九篇十三、十五節である。「人の三分性」二八八号（一九二四年七月）においても、同じ詩篇一三九篇を引用し、「数百年に渉り解剖学者が精力を傾注して之を研究せしも猶ほ其少部分を知り得しに止まる」と述べている。

(53) ドイツの社会学者M・ヴェーバーによればオランダの著名な昆虫学者・解剖学者 Swammerdam, Jan (1637-80) は、「ここに一匹の虱を解剖して神の摂理の証拠をあなたがたに示そう」と述べたとのことである。『職業としての学問』。

(54) 「八重桜咲き百花爛漫の春と成った。今や自分の体が唯一の研究物である。血の循環、尿の排出、浮腫の出現並に消滅、昔し習ひし解剖学と生理学を喚起し、我れと我体を観察するは興味多き研究である。詩篇一三九篇十四節が心に浮ぶ。

我れ爾し感謝す、我は畏るべく奇しく造られたり。爾の事跡は悉く奇し、我が霊魂は審に之を知れり

友人等は自分以上に自分の病に就いて心配して呉れる。斯かる場合に自分が友人に如何に富んでゐる乎に気附く。有難い事である」。「日々の生涯・一九二九年四月十七日」三四六号(一九二九年五月)。

(55) 「体は外の物質界に接する所であって、霊は内の霊界に接する所である、そして二者の間に心が在って、或は体を以て物質に接し、或は霊を以て神と交はるのである」「人の三分性」二八八号(一九二四年七月)。

(56) 「此世界の事実は余の世界なるキリストの国の事実を説明する、余が現世に対して興味を感ずるは此理由からしてである」「聖書と現世」二二四号(一九一九年三月)。

(57) 「祈祷の模範」一七六号(一九一五年三月)。

「我等の救拯は全宇宙のそれと共に完成せらる、……自己一人救はるゝに非ず、全人類全宇宙と運命を共にするのである、是に於てか小なる自己中心の信仰は消滅して我が宗教は同時に又万物の宗教となるのである。」「万物の復興」二一二号(一九一八年三月)。

「人類の救拯を離れて個人の救拯なる者はない、キリストは固より人類の救主である、そして人類の救主たるの資格を以て個人を救ひ給ふのである」「救拯の完成」三四八号(一九二九年七月)。

(58) 内村はキリストの復活が、基督教の要石である、と言う。「甦りしキリスト」五三号(一九〇四年六月)。

補註1「宗教と医学」

内村は宗教が霊魂の医術であることを、繰り返し述べている。一箇所引用しよう。「宗教は其実際的方面に於ては確かに医術の一種である、是れは人を基霊魂に於て救ふことである、人の救済が最大の目的である」「医術としての宗教」九四号(一九〇七年十二月)。この論文は、「或る夜信仰を共にする或る医師に語りし所」で、内村によれば、「霊魂の救済術も亦肉体のそれの如くに、確実なる精密なるものとならなければならない」。そしてそれは遠からずして実現すると考えていた。宗教が「精密なる科学」となるとは、「すべての人に向って同一の療法を施すのではなくして、各人の病の性質に循って特別の療法を施すに至る」ことである。たとえば、疾病の原因には、それを衷に有つ場合と外に有つ場合があり、「前者は感情其物の疾病で

あって、後者は感情の外より乱されたる疾病である」として、それぞれの病への処方箋を提示している。そして結論として、「宗教家も心的患者を一人一人と診察し、各自適応の治療を施すにあらざれば医師の功を奏することは難いではない乎」と述べている。内村は、高壇から不特定多数に語る公開演説に、その効果の点で疑問をいだいていたようである。内村は「公開演説の効力」二号（一九〇〇年十月）で、「最も効力ある説教は座談なり、二人相対して語る事なり、各説教師にして此法を執るに至らんか、世は遠からずして基督の王国となるべし」と述べている。

内村は周知のように、若き日にアメリカで医学部（ペンシルベニア大学）に入学することを真剣に考えたことがあった。一八八五年内村が二五才の時、アマスト大学の新島襄あての手紙で、内村は次のように書いている。

直接伝道か間接伝道かの問題は、依然として小生を悩ましています。もし前者となることが神のみ心ならば、小生はシーリー博士その他のような聖徒の指導下におかれなければなりませんが、もしも後者となることが小生の為すべきことならば、小生は肉体を癒す者となることを望みます。ペンシルベニア大学の返事はここ数日中に来るでしょうが、もし拒否的でしたら、小生はそれを、世俗の仕事に就こうとの一切の考えを捨てされとの神の明らかなみ声と見なすつもりです、『内村鑑三日記書簡全集』（教文館）5、一五五頁。

このペンシルベニア大学医学部入学は、肯定的な返事をもらいながらも、「納得できないある契約事項がついて」いたために、実現しなかった。同書一六〇頁。しかし、医者になるとの内村の願いは、霊魂の医者として生涯を送ることで達成されたのではないか。さらに宗教が一つの精密なる科学とならなければならないという提言は、息子祐之が専攻することになった、精神医学において、実現したと考えてよいであろう。内村が、代々、伝道師と医師とが交互に出ることを願い、息子の勉強に大いなる興味と期待とを持ったのも、以上述べたことから了解できる。内村が宗教と医学に言及した論文には次のようなものがある。「医学と信仰」一三八号（一九一二年一月）、「医家の証明」一九八号（一九一七年一月）、「医学士武信慶人君を葬るの辞」二八三号（一九二四年二月）。その他は次の補注「神癒」についてを参照。

補註2「神癒」について

内村は「神癒」すなわち病の「信仰治療法」についてどのように考えていたのであろうか。内村が病の信仰治療について最初に（?）言及したのは、『宗教座談』（一九〇〇年四月）の第七回「復活の事」においてである。そこで内村は次のように書い

ている。

病の信仰治療法なるものは決して迷信ばかりではございません。（中略）世に清き良心ほど身体の薬になるものはありません。キリストはすなわち、われわれの霊魂より罪の責任を全く取り除いてくださるのでございますから、その罪の消滅と同時に私どもの肉体が非常に活気を帯びて来るのは、キリストの救済にあずかりし者の何人でも実験するところでございます。「内村鑑三信仰著作全集」（教文館）3、五一頁。

信仰治療法で問題となるのは、医薬を用いるかどうかである。この点に関する内村の考えは明白である。

余は医薬を用ゆる事は決して聖書の教訓に反する事でないと信ずる者である、而已ならず多くの場合に於ては之を用ひざることが却て神の聖旨に反くことであると信ずる者である、「信仰治療の可否」二七号（一九〇二年十一月）。

内村はなによりも、常識を重んじる。病気の場合も、「普通の常識に訴え」て、信頼できる医師の治療を受けることを、信者のなすべき事であるとする、けれども、「悪い事とは医師にのみ頼て神に頼らない事である」。したがって、「吾等神を信ずる者は適当の範囲内に於て医師を信ずべきである」というのが内村の結論である、そして、病気が癒されたときには、「医師に感謝するよりも多く医師の医師たる神に感謝すべきである」と言う。（以上は「信仰治療の可否」による。）

内村の基本的な考え方は、「人の生命には肉体的と霊的との両面がある」ということである。したがって、「肉の病を治す方でも肉的方面からばかり治療を加へたのでは足」らないのである。霊的方面の治療として信仰が必要とされるのである。内村によれば信仰は第一に、心の統一を来たす。すなわち調和が人の心に臨むようにする。第二に、神に頼る心をおこさせる、そして第三に、精神の活動を活発にし、それが肉体に良き効果をもたらす。「近世医学の一大欠点は確かに此霊的方面を無視する事であります、若し信仰のみを以て何れの疾病をも癒すことが出来ると言ひましたならば確に過言でありませうが……」「信仰と健康」四六号（一九〇三年十一月）。

次に内村が「神癒に就て」問答形式で詳しく述べている論文があるので、それを紹介しよう。七一号（一九〇六年一月）。

内村は最初に「神癒を信じるか」という問いに、「勿論信じます。神が造りし此身体、神が其疾病を癒し得ないといふ理はありません」と答えている。「神に於ては癒す能はざる疾病はない」ということは「神癒に就て」二六五号（一九二二年八月）

にも述べられており、一貫した内村の信仰である。けれども、問題は私達の疾病を神が如何にして癒し給ふ乎である。奇跡だげが医癒の唯一の方法ではなく、医術もまた疾病を癒す方法として使用される。それが、「常識に適ふたる信仰の途であると思」うと、内村は述べている。たしかに、医術に多くの誤謬がある。けれども、「我等人間は我等の有つ丈けの智識に頼るの外に途はなく」、医術を「悪魔の術」として排斥する理由とはならない。「神癒に就て」七一号。

内村は「万事万物を知識信仰の二方面から考へなければなりません」と言う。したがって、病気にかかった時は、理学的方面を研究し、病気を癒すために、理学的方法を取らなければならない。しかしそれだけでは足りず、その信仰的方面、すなわち神の摂理が奈辺にあるかをも究めなければならない。内村によれば、「人生万事尽く然りであります。之に理学的理由があります、又信仰的理由があります、二者孰れも看逃す事は出来ません」。それならば、両者はどちらがより深い理由なのだろうか。内村によれば、信仰的理由の方がより深くある。「論理学の術語を藉りて言ひますならば、信仰は大前提であつて、理学は小前提であります」。それ故に、理学の結論が成るのではなく、神の聖旨が成就する。このように内村にあっては、医学が信仰のもとに取り入れられているのであるが、その理由として、内村の神の摂理への信仰を挙げることが出来る。すなわち「我等人類は神の摂理と云ふ大なる囲の内に在る道理の世界に棲息して居るのであります」。「理学と信仰」二八〇号（一九二三年十一月）。

内村にあっては、かくして科学（医学）と宗教とが相互に矛盾することなく、しかも混同されることなく位置づけられている。つまり、医学が究明する世界は、神の摂理のもとにある「道理の世界」なのである。したがってもしこの「道理の世界」を無視して、信仰だけの癒しを求めることが、「神癒」だとすれば、内村はその立場をとらない。

余は出来得る丈け天然の法則に従ひ、又出来得丈け信仰の道を守れり、然して病は漸次その勢を失ふに至れり、余は之を以て常識の道に適ふたる信仰の道なりと信ず余は世の所謂る神癒説なるものに未だ全然服従する能はざるなり。「神癒説と疾病」七二号（一九〇六年二月）。

内村が所謂「神癒説」に反対するもう一つの理由がある。それは、「神癒説」が「肉体の治癒を余りに重視する」からである。たとえ肉体の疾病は癒されなくても、この身このままで、神を讃美し、神に感謝することが出来る。「癒されざる事が却て喜びである。」。「路加伝講義(三)奇跡の一日」二〇〇号（一九

一七年三月)。

内村によれば、「健康のみが善き事ではない、病気も亦善き事である」「善き事三つ」九号(一九〇一年五月)。内村は一見マイナスと思われることに、プラスの価値を見い出していく。そこに内村の人生観がある。内村の病気について考えは、稿を改めて論じることにしよう。内村の神学思想は、病気および死への考察がその根底にあった。その意味で内村の神学思想は実存的であった。なお武藤一雄先生の「病気と信仰」『キェルケゴール』一九七七年は、病気の問題についてのすぐれた信仰的洞察にもとづくもので、教えられるところ多い。

(一九八二年十月十三日)